

4000万人の頭痛 155

千夜一夜の頭痛物語

安価かつ質のよい、世界に誇れる日本の医療

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

日本が世界有数の長寿国になった要因はいくつか挙げられます。

もちろん国民皆保険はその大きな要因の一つであると思われませんが、それだけではなく、日本人本来の繊細さも関係していると思われれます。当然、個人のスキルや知識の差もありますが、概して診療にあたる医師も、欧米の医師に比して繊細かつ慎重であると私は感じています。これは海外に赴任される、もしくは移住された私の患者様たちの証言にも基づいた感想です。日本での診療に慣れ親しんだ彼らには、先進国である欧米での診療ですら、複雑、画像検査などの精査も行わない。症状だけの問診で触診もろくに行わずに、



多量の投薬の挙句、高額な医療費を請求されるとさんざんに感じられることが多いです。従って患者様たちは、最低でも年に一度は医療を受けるため、わざわざ帰国される、もしくは万一、手術が必要となる際には必ずと言ってよ

いほど帰国されることが多いように思われます。

先日、私の中国籍の患者様で、脳動脈瘤の手術を当大学で受けられた方から受診の際、ご自分の妹が観光目的で来日されており、少し具合が悪いので診てほしいと依頼されました。何うと、北京の大きな病院でMRI検査を施行され、脳梗塞との診断で投薬治療されているとのことでした。持参されたMRIのフィルムを一見したところ、どう見ても脳梗塞とは思えないくらい脳が腫れていました。翌日、即座に造影剤を用いたMRI検査を再度行ったところ、悪性脳腫瘍(グリオブラストーマ)であることが判明しました。この時点で患者様は本国での医療に不信感を持たれ、当大学で手術および術後の化学療法を行ってほしいと懇願されました。日本の国民健康保険は当然なく、また旅行に際しての海外保険にも加入されていないので、日本での加療に必要な、およその医療費の総額は、自分で1千4百万円くらいかかると、大学当局で試算しました。たまた手足のけいれんも起こされており、また脳の腫れも強く、時間的な余裕もあまりないので、とりあえず総医療費の半額程度を用意できれば、まずは救命的な外科的治療を行えるように大学当局と話し合い、医療費は日本のご家族が何とか

工面されるとのことでした。このようなケースに遭遇するにつけ、

診している私たちは、改めて、至れり尽くせりの日本の質の高い医療に感謝することを忘れてはならないと痛感されます。ましてや他国で受診の必要性が生じないよう、持病のある方は、事前に医療機関を受診し、万全の体調で海外旅行に臨むことが推奨されます。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、学校法人東京女子医科大学 評議員を歴任、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グループケアパートナー理事。ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すずきの木クリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」(マガジンハウス)をはじめ、頭痛関連の著書多数。2024年6月号より、ANAグループ機内誌「翼の王国・TSUBASA-GLOBAL WINGS-」にて『雲の上の診察室』連載中。



新刊『ウルトラ図解 おとなと子どもの頭痛』監修/清水俊彦 法研(本体1600円+税) 2月18日(火)発売

